

親鸞は父母の孝養のためとて、一返にても念仏もうしたること、いまだそうらわず。そのゆえは、一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり。いずれもいずれも、この順次生に仏になりて、たすけそうろうべきなり。わがちからにてはげむ善にてもそうらわばこそ、念仏を回向して、父母をもたすけそうらわめ。ただ自力をすてて、いそぎ浄土のさとりをひらきなば、六道四生のあいだ、いずれの業苦にしずめりとも、神通方便をもって、まず有縁を度すべきなりと云々

第5章

「一切の有情は、 みなもって世々生々の父母兄弟なり」

北第3組 即信寺住職

亀谷 亨

text by Susumu Kamegai

宗祖の念仏が追善供養の呪文でないことは教えを聞き続けていた同行なら知っていたはずですが。しかし本章を読むと、その中に追善供養のために念仏を申していた人が数多くいたことが伺われます。それは念仏についての了解が曖昧ということだけでなく、私たちが亡き人とどういう出会いをしているかという問題が根底にあるのでしょう。

宗祖自身は、例えば『和讃』に、「釈迦弥陀は慈悲の父母 種種に善巧方便しわれらが無上の信心を 發起せしめたまいけり」と言われるように、肉親の情を超え、自身の仏道の歩みを支えるはたらきとして「父母」という言葉を頂かれています。

しかし、釈迦弥陀二尊であるならば、「自らの仏道の歩みを支えるはたらきとしての父母」と仰ぐことに違和感はありませんが、本章においては、「一切の有情は、みなもって世々生々の父母兄弟なり」と、「生きとし生けるものはすべて業縁関係として父母兄弟である」という位置づけで語られています。

業縁関係とは、業縁によって存在している事実を自己の都合で見る意識によって、その関係は心地よいものだけではなく、愛憎違順し、日々、怨親相交わる生々しい関係です。その存在を「自らの仏道の歩みを支えるはたらきとして

の父母」と頷くことは可能なのでしょうか。

私たちはいつも他者を自分の都合というモノサシでしか見ることができません。そのモノサシに合えばいい人、外れたなら悪い人と決めつけるような見方しかできないのが、業縁に繫縛された凡夫の眼です。

ですから、亡き父母を慰霊や鎮魂の対象と見ているということは、その生きざまや死にざまが自分の都合に合うか合わないかという、自我のモノサシで裁いているということにほかなりません。その迷妄が破られない限り、亡き人も自分も共に助かる道が閉ざされていくのです。大切なことは、死者を自分の都合でのみ見ている自分自身がそのモノサシからどう解放されるかなのでしょうか。

宗祖は続けられます。「いずれもいずれも、この順次生に仏になりて、たすけそうろうべきなり」。仲野良俊先生は「順次生は、迷いの次の生ということ。お念仏によって目覚めさせていただく。仏の世界を見つけさせてもらった。そこから仏の力をいただいて、一切のものを助けていく道が開けていくのであるということなのです。」と言われます。

つまり、「一切の有情はすべて世々生々の父母兄弟」という目覚めは思弁や感情による観念的なものではなく、本願との出遇いによって開かれた生命感覚だということです。自我のモノサシで裁いていた他者が本願を通して触れ合ってみるとまったく違ってくる、亡き人と出遇う世界が一変するのです。

ここにおいて亡き人は追善して救う対象でもなければ、慰めるべき迷える霊でもない。亡き人を「怨」と見ている私の闇がその亡き人から問われている。「親」と見ている私の都合が亡き人から問われている。どんな生き方をした人も、どんな死に方をした人からであっても、罪業深重なる自らの課題に目覚めよと呼びかける声が聞こえたなら、その人は「父母」であり、「諸仏」なのです。

そういう世界をすでに賜っていた私だった、先立った無量無数の諸仏によって、すでに願われ続け、問われ続けられている自分だったということが本願との出遇いによって気づかされる、それこそが宗祖が伝えようとされた念仏の救いなのでしょう。本願の世界に目覚めてこそ、すべての亡き人が本願に出遇えと願う父母・諸仏となるのです。本願に出遇い、本願にしたがい、本願に生き方をうながされて初めて怨親平等の世界が開かれるのです。